（様式５）　　平成２９年度　　教職大学院派遣研修　研究報告書

派遣者番号	29K07	氏　名	坪田　裕希
研究主題 ―副主題―	中学校外国語科における学習意欲を高めるパフォーマンステスト・デザイン		
派遣先	玉川大学教職大学院	担当教官	佐藤　久美子
所属校	武蔵野市立第一中学校	校長	若槻　善隆

キーワード：パフォーマンス評価，スピーキングテスト，波及効果（backwash effect）

１　研究の背景（目的）・主題設定の理由

グローバル化が急速に進展する現在、外国語によるコミュニケーション能力が生涯にわたる様々な場面で必要とされる未来が予想されている。その一方で、中等教育における外国語授業では依然として文法・語彙等の知識がどれだけ身に付いたかという点に重点が置かれていることが指摘されている。「話すこと」の言語活動が十分ではなく、またそれを評価する機会も限られているという課題の解決に向けて、大学入試への「４技能評価」の導入が文部科学省で検討されており、高校入試においても同様の方針が平成 29 年 12 月に東京都から出されたところである。そのような背景を踏まえると、中学校における「話すこと」の評価方法、すなわち「パフォーマンステスト」の重要性が今後増すことは明白である。

本研究の目的は二つある。一つ目は、中学校外国語科におけるパフォーマンステストの実施が中学生の英語学習にもたらす影響、すなわち波及効果（backwash effect）を調べることである。二つ目は、その検証に基づき、学習意欲を向上させたり、学習を促進させたりする効果を期待できるパフォーマンステスト・デザインを考察することである。

２　研究の内容・研究の方法

２．１　対象

都内公立 A 中学校において，平成 26 年度から 28 年度までの３年間で28回のパフォーマンステストを受けた生徒 104 名

２．２　方法

（1）中学卒業後の追跡調査の分析

【平成 29 年７月～９月実施 ／ 回収率 66.3%】

（2）在学中の各種調査結果の分析

【テストへのフィードバックや都立入試結果等】

２．３　補足データ

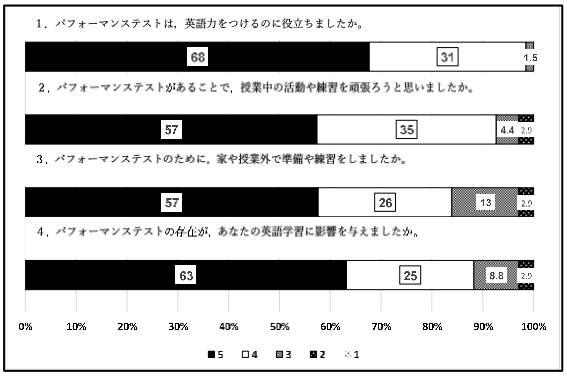
A 中学校の平成 28 年度の第３学年の在籍は 104 名で、卒業時の英検取得率は準２級以上が 55.8%、３級以上が 79.8%であった。また、行ったパフォーマンステストは以下のとおりである。

（表１：パフォーマンステストの種類別回数）

	第１学年	第２学年	第３学年	合計
音読テスト	5 回	3 回	2 回	10 回
スピーチ	2 回	1 回	0 回	2 回
ALT との面接	3 回	5 回	2 回	10 回
スキット（寸劇）	1 回	1 回	1 回	3 回
その他	0 回	1 回（リテリング）	1 回（レシテーション）	2 回
合計	11 回	11 回	6 回	28 回

３　研究の結果

３．１ 中学卒業直後の追跡調査結果



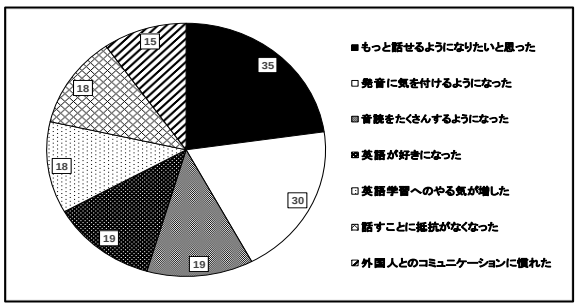
(図1：パフォーマンステストの波及効果)

5- とてもそう思う　4- そう思う　3- どちらでもない　2- あまりそう思わない

1- 全然そう思わない

パフォーマンステストが英語力をつけるのに役立ったと思っている生徒が 99%に上る。また、それがあることで授業中の活動や練習を頑張ろうと思った生徒が 92%おり、そのために家や授業外で準備や練習をした生徒が 83%である。

次の図２は、上記の設問４「パフォーマンステストの存在が英語学習に影響を与えましたか」に４か５を選択した 60 名が、「どんな影響でしたか」に回答したものである（複数回答可）。

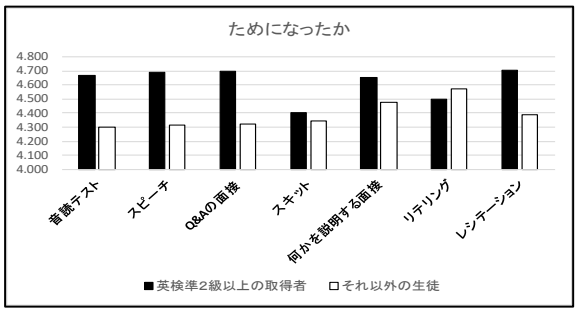


（図２：英語学習への具体的な影響）

パフォーマンステストの存在が英語学習に影響を与えたという生徒は 88%で、その具体的な内容として一番多かったのが『もっと話せるようになりたいと思った』であり、その次に多いのは『発音に気を付けるようになった』である。

３．２ 在学中のアンケート調査の分析

次の図はそれぞれのテスト形式に対して卒業時に英検取得級が準２級以上の生徒(58 名：Fast Learners)とそれ以外の生徒(46 名：Slow Learners)の回答を比較したものである。



（図３：パフォーマンステストに対する生徒の評価）

5- とてもそう思う　4- そう思う　3- どちらでもない　2- あまりそう思わない　1- 全然そう思わない

３．３ 発音能力とその他能力との相関

次の表２は、３年間で行った音読テスト 10 回分の成績の平均と都立入試の得点結果を比べたものである。発音の評価は JTE と ALT の合議によるものであり、評価基準は、５-Almost Native Level、４-Accurate、３-Good、２-Fair、１-Poor とした。なお、入試得点と発音評価の間には 0.683 の相関があり、１%水準で有意差が認められた。

（表２：発音能力と都立高校入試得点との相関）

＜共通問題校受検組＞（同意書提出率 94.3%）

都立入試得点	人数	発音の評価平均
90 点～100 点	１２名	3.44
80 点～89 点	７名	3.09
60 点～79 点	６名	2.60
10 点～59 点	８名	2.22

４　研究の考察

3.1 の結果から、パフォーマンステストの実施が英語学習の促進に有意であり、意欲の向上にも資するものであったことが示された。

3.2 の結果からは、Fast Learners と Slow Learners とでは、テスト形式の得意、不得意や好みが分かれることが明らかになった。3.3 の結果からはパフォーマンステストにおける発音の評価とその他の技能との関係に関しては、発音能力が高いほど、総合的な英語力も高いという相関関係が認められた。これはパフォーマンステストが自分の言語能力を試すアウトプットの機会として機能し、達成度の適切なアセスメントを受けることで次回の目標を立て、その結果学習意欲が高まり、また練習に励むという好循環が生み出せたからだと推察する。このサイクルが寄与する成果は、スピーキング指導に重点を置いたり、時間を割いたりすることに躊躇している高校教員に対してや、「話す・聞く」活動が中心の小学校英語にも示唆を与えられるものだと考える。

これらの結果に基づき、具体的なパフォーマンステスト・デザインに関して考察する。

①１度のテストではタスクは１つに絞る。タスクは年間を通して多様性をもたせる。②１回のテストは１分～２分で行えるものにし、その分回数をこなす。目安は各単元に１回（学期に３回程度）。③採点は「分析的採点」で行い、生徒の長所と課題を具体的に示す。④生徒への予告は必ず行う。⑤授業の進度を妨げないように実施方法を工夫する。Interview Test の場合は、通常の授業を行いながら ALT の待つ別室へ１人１人が行く形にする。⑥評価は ALT と JTE の２人で行うのが望ましい。⑦生徒へのフィードバックはなるべく早く行う。

５　今後の展望

本研究では、パフォーマンステストの波及効果を明らかにし、それが生徒の英語学習への意欲を向上させることを示した点、Slow Learners が動機付けを強められるテスト形式を明らかにした点、入試得点と発音能力との間には相関があることを統計的に示し、パフォーマンステストが受験には無関係ではないことを示した点で意義があると考える。

今後の課題は、パフォーマンステストを活用しての更なる効果的な指導法の開発、テスト内容の学習発達段階に合わせた工夫とその評価法の追究である。